

研究課題 (テーマ)		「手術侵襲の生体反応と回復過程における看護」の ICT 教材開発 -臨床指導看護師と看護学教員の共同開発-	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学科	教授	栞子 嘉美
分担者	看護学科	准教授	城戸口親史
	看護学科	講師	寺内 英真
	看護学科	講師	二本柳 圭
	富山県立中央病院看護部	研修科長	四十田真理子
	富山赤十字病院研修センター	看護師長	山本 百合
研究結果の概要			
<p>研究目的は、手術侵襲の生体反応と回復過程における看護」の学生向け ICT 教材を臨床指導者と共同で開発し、開発した教材を用いて自己学修した効果を検証する。</p> <p>令和 2 年度からの継続している研究である。周術期 ICT 教材完成に向け、学修項目に適したコンテンツとなる臨床実践の画像等素材の選出の検討を進めた。</p> <p>現在抽出されている学修目標は、侵襲と生体反応、Moore の術後回復過程、術直後から回復期<「Moore の術後回復過程」の傷害期から転換期>、身体機能低下と合併症に関するアセスメントした看護として、系統的な観察項目や安全を守るためのライン類の管理、術後早期体動に関する 15 項目である。</p> <p>その 15 項目について「妥当である」「妥当ではない」「どちらでもない」「分からない」の 4 件法で測定した結果、「妥当である」の一致率は 88.3%であり目標には達していない。教員間で学修項目の一致率 90%を目指すには、形態機能学や臨床医学の知識が多く含まれ、かつ時間的経過の変化の中で重要な看護の項目が多く端的に示す目標設定が必要である。</p> <p>一方で、令和 3 年度より臨地実習が始まり、富山県内の急性期病院における周術期看護を臨床指導と実習目標と学生の実習評価を共有してきた。現在は With コロナ下の学修環境が求められ、それに適した教材の再検討を行っている。今年度は臨地実習が可能ではあったが、予定されていた患者の入院取り消しや手術の日程変および中止など予定していた学習が実施できにくい状況が生じている。そのため、臨地で学習する予定の状況に近い教材を活用して学内で演習できる、また目指している ICT 教材を遠隔で学習し臨地実習につなげる、フィードバックすることが可能など、教材の利便性を高める工夫が必要と考える。</p>			
今後の展開			
<p>看護系学士課程コア・コンピテンシーに基づいた学修目標は継続し、かつ With コロナにおける学修環境に適した教材開発を進める。具体的には臨地実習が行えない場合でも同様の状況をイメージし学内演習が可能なこれまで進めてきた ICT 教材と、3D スキャナー・プリンターで作成したリアルな教材等である。</p>			